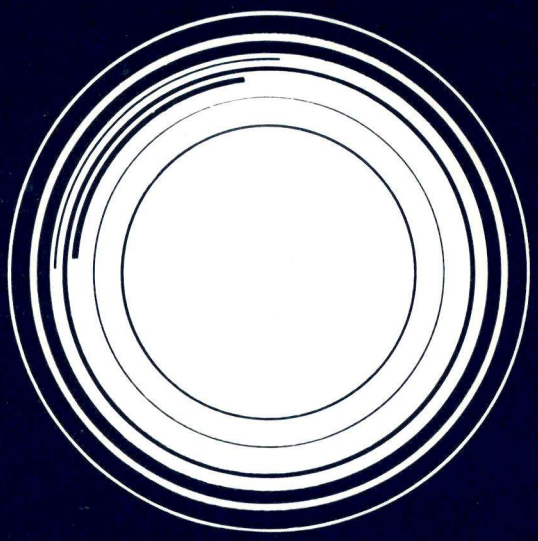
THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA SUMMER CONCERT



1965・8・23

エンジェル レコード 発売10周年記念　★10周年豪華記念盤

――天才ピアニスト・フランソワの最新ステレオ――



★フランソワ
ベートーヴェン三大ソナタ集

第８番
「悲愴」
第14番
「月光」
第23番
「熱情」

サンソン・フランソワ（ピアノ）
ＡＡ－7267

フルトヴェングラー・ステレオ名演集

ベートーヴェン
★交響曲第６番「田園」　ＡＡ－7239
★交響曲第７番イ長調　ＡＡ－7238

モーツアルト
★交響曲第40番ト短調

ハイドン
交響曲第94番「驚愕」　ＡＡ－7240

フルトヴェングラー指揮
ウィーン・フィルハーモニック管弦楽団

クリュイタンス
★ルーセル管弦楽曲集
「バッカスとアリアーヌ」「くもの饗宴」
弦楽のためのシンフォニエッタ　ＡＡ－7262

★ビゼー管弦楽曲選集
「アルルの女」第１、第２組曲
「カルメン」組曲　ＡＡ－7241
クリュイタンス指揮／パリ音楽院管弦楽団

フィッシャー＝ディースカウ
★シューマン―アイヒェンドルフ歌曲集
リーダークライス作品39／宝を堀る人／
陽気なさすらい人／春の娘／世捨て人
フィッシャー＝ディースカウ（バリトン）
ジェラルド・ムーア（ピアノ）　ＡＡ－7268

シフラのリスト
★死の舞踏　ハンガリア幻想曲
ジョルジ・シフラ（ピアノ）
ヴァンデルノート指揮
フィルハーモニア管弦楽団　ＡＡ－7245

ランパルのハイドン
★フルート四重奏曲（全６曲）
ジャン＝ピエール・ランパル（フルート）
フランス弦楽三重奏団　ＡＡ－7256

ラッキーダブルプレゼント

適用期限　10月31日当日消印有効
対象レコード　エンジェルクラシック
①ＬＰ５枚でＬＰ１枚贈呈
②10周年豪華記念盤１枚でＬＰ５枚贈呈（100名様）
詳細は東芝レコード特約店にお立ち寄りの上お問い合わせください。



東芝の
エンジェル レコード
東芝音楽工業株式会社

★印は
10周年豪華記念盤です

新響サマーコンサート

指揮　芥川也寸志

管弦楽　東京労音新交響楽団第1オーケストラ

曲目

I　歌劇「魔弾の射手」序曲……カール　マリア　フォン　ウェーバー

II　交響曲第6番ヘ長調「田園」作品68……ルードウィヒ　ヴァン　ベートーヴェン

1　田舎に着いたときの愉快な感情のめざめ：速く但し控え目に

2　小川のほとり：遅めに感動を以って

3　田舎の人々の楽しい集い：速く

4　雷雨，嵐：速く

5　羊飼の歌，嵐のあとの神への感謝：少し速く

III　ハンガリー行進曲　歌劇「ファウストの劫罰」より……エクトル　ベルリオーズ

IV　スラブ舞曲　第10番　ホ短調　作品 72—2……アントン　ドボルザーク

第1番　ハ長調　作品 46—1……〃

V　ボ　レ　ロ……モーリス　ラヴェル

Conductor　Yasushi Akutagawa

Orchestra　The New Symphony Orchestra

Programme

I　**"Die Freischütz" Oveture** ……Carl Maria von Weber

II　**Symphony No. 6 (Sinfonia Pastorale) F major op. 68** …… Ludwig van Beethoven

1　Awakening of happy feelings out into the country : Allegro ma non troppo

2　By the brook-side : Andante molto moto

3　Merry gathering of the country folk : Allegro

4　Thunderstorm : Allegro

5　Shepherd's song, happy and thankful feelings after the storm : Allegretto

III　**Hungarian march**　from the opera "La damnation de Faust" …… ……Hector Berlioz

IV　**Slavic dance**　**No. 10　E minor op. 72—2** …… Anton Dvorak

No. 1　C major op. 46—1 ……〃

V　**Bolero**……Maurice Ravel

1965年 8 月23日(月)午後 7：00 東京文化会館大ホール

曲目解説

歌劇「魔弾の射手」序曲……ウェーバー

歌劇「魔弾の射手」はドイツの古い伝説に題材をとり，後のワグナーの楽劇によって頂点に達するドイツオペラの最初の傑作と言われています。そして序曲の中にはその劇的な内容が交響詩のようにぎっしりと盛り込まれているのです。

曲はハ長調のごくゆっくりとした4拍子の序奏に始まります。静かな対話風の8小節が過ぎると一たんフェルマータで途切れ，次に弦楽器のゆれ動く中にホルンの4重奏が聞こえて来ます。この旋律はきわめて有名なもので，中学校の教科書や讃美歌の中にもとり入れられているほどです。こうしてこのオペラの舞台であるドイツの深い森の情景が描かれると曲は一変して暗いハ短調の急速なテンポになり，魔弾を作る恐ろしい狼谷の音楽となります。明日に迫った射撃競技に優勝して愛するアガーテを晴れて，妻に迎えようとする主人公の狩人コックスは，仲間の一人にそそのかされて悪魔ザミエルに魂を与え，その代わりにねらった物に必ず命中するという魔法の弾丸7発を授かります。クラリネットに出る不安なメロディーは劇中マックスが何か恐ろしい力のとりこになったような気がすると歌うものです。7発の弾丸のうちの最後の1発は悪魔の思うままの物に命中することになっています。競技会でマックスの放つた最後の弾はアガーテをねらってしまいます。ところがアガーテの深い信仰の力が悪魔の魔力にうちかって，代わりにマックスをそそのかした仲間のカスパールが弾に当たって倒れます。やがてバイオリンとクラリネットに始まり3本の木管に受けつがれる美しい旋律は，アガーテが胸の内を歌う有名なアリアからとられています。曲は再び狼谷の場面に戻りますがそれは途切がちになり，突然起こる全合奏によるハ長調の主和音に導かれて，アガーテのアリアの主題が，このオペラの結末を象徴するかのように明るく高らかに歌いあげられます。

なお作曲者のカール・マリア・フォン・ウェーバーは，1786年生まれですが，モーツアルトの妻コンスタンツェの甥であったといえば大体時代が想像していただけるでしょう。歌劇「魔弾の射手」が完成したのは1821年のことでした。

交響曲第6番ヘ長調「田園」作品68…
……ベートーヴェン

ベートーヴェンがどれほど深く自然を愛したかは数々のエピソードと共に語り尽くされています。耳を失い，恋を失った彼をいつも慰さめてくれたのは，この田園交響曲の完成されたウィーンの郊外にあるハイリゲンシュタットの森に代表される田園の自然でした。

この曲の題名は，ベートーベンが自分で付けたもので，楽譜にはさらに"田園生活の思い出"とも書いてあるそうです。また各楽章にも，短い標題が記されています。この曲には小川のせせらぎや鳥の鳴き声（第2楽章），雷や嵐（第4楽章），牧歌（第5楽章）など多くの自然描写があるために，この曲が単なる描写の音楽であると受け取られることを恐れてベートーヴェンは"絵画よりはむしろ田園の感情をあらわしたものだ"という但し書きを付けています。

この第6交響曲は，これまた有名な第5交響曲「運命」と時を同じくして作られ，1808年の暮に第4ピアノ協奏曲などと一しょにウィーンで初演されました。二つの交響曲は性格的には裏と表のように違いますけれど，注意すれば手法の上でよく似た所が沢山あることに気がつくでしょう。

第1楽章　"田舎に着いた時の愉快な感情のめざめ"はヘ長調の軽快な2拍子で，すぐに第1バイオリンに初めの主題が出ます。これがひろがって全オーケストラに行きわたると‘木管とバイオリンの対話によるつなぎを経てハ長調の第2主題に進みます。低音部と高音部に裏と表のふしがかわるがわる現われてからみ合いながら発展していきます。中間の展開部は第1主題の第2小節目のリズムを延々と繰り返しながら少しずつ気分を変えていき，やがて再現部が来て第1主題は今度はいきなり全合奏で出ます。その後は型どうり第2主題と結尾部があって終るのですが，終始うきうきとした，朗らかさにあふれた楽章です。

第2楽章　"小川のほとり"は変ロ長調8分の6拍子。その標題のように弦楽器による小川の流れを示すバックがずっと続いています。第1楽章と同じくソナタ形式で，中心となる2つの主題はいずれも第1バイオリンに現われます。この楽章の終りに鳥の鳴き声が出てくる訳ですが，始めはフルートによる夜鳴きうぐいす，それにオーボエのうずらとクラリネットのかっこうが続きます。

第3・第4・第5楽章は続けて演奏されます。まず第3楽章は"田舎の人々の楽しい集い"。ヘ長調の速い3拍子でいわゆるスケルツ☆と呼ばれるものです。弦楽器のせわしい動きに始まり，それに一たんけりがつくと，オーボエに新しいいなか風の，しかし軽快な旋律が出ます。これがクラリネット，ホルンに受けつがれた後，2拍子の中間部に入ります。ここは一そう土の匂いの強いまた力の入った舞曲です。スケルツ☆に戻りますが2度目は中途でハタと止まってそのまま低い弦楽器による遠雷に始まる第4楽章"雷雨，嵐"に続きます。第2バイオリンの不安な動きはやがて，今まで沈黙していたトロンボーンとティンパニィを加えた全オーケストラの爆発による嵐をひき起こします。次いでピッコロも加わり，雷を伴った大暴風雨になります。ベルリオーズはこの場面を：

…トロンボーンが破裂，ティンパニィの雷鳴はいよいよ激しさを増して，もう雨ではない，風でもない，身の毛もよだつ天変地異，全世界の大洪水……

とある本に書いているほどです。やがてさしもの嵐も遠のき，かすかに残る遠雷も消えてフルートのかけ橋を渡ると第5楽章"羊飼の歌，嵐の後の神への感謝"となります。クラリネットとホルンの牧笛のようなふしに導かれて始まるこのヘ長調8分の6拍子の終楽章は何とも平和でおだやかな音楽で，前の急速なヘ短調の嵐との対比が見事です。中心になる2つの主題は，共に第1バイオリンに出ますが，その始めのものは変奏曲風に何回も形を変えて繰り返されます。ホルンの牧笛がかすかに響くうちにこの美しい自然の音楽は幕となります。

ハンガリー行進曲……ベルリオーズ

これはフランスのエクトル・ベルリオーズ（1803～1869）がハンガリーの古い国民歌を管弦楽用に編曲したもので，ラコッツィ行進曲とも呼ばれています。ベルリオーズが1846年，ハンガリー旅行に際して何かハンガリー人の喜ぶ出しものを考え，出発の前の晩に編曲をしたと言われています。これは予想通りハンガリーで大当りをとったので，後年の彼の傑作，劇的物語「ファウストの劫罰」の中にこの曲をいれるためにわざわざ物語の幕あきの舞台をハンガリーに持って来たのだそうです。

曲はイ短調2分の2拍子。金管による6小節のファンファーレの後におなじみのメロディーが出てきて3部形式の行進曲が続きます。特に曲の後半は金管と打楽器の活躍するはなやかなものでオーケストラ使いの上手なベルリオーズの面目を見事に発揮した聞かせどころです。

スラブ舞曲……ドボルザーク

1台のピアノを4本の手で弾く連弾はヨーロッパでは家庭音楽として広く行われていました。このための曲としてはシューベルトの軍隊行進曲やブラームスのハンガリア舞曲が有名です。アントン・ドボルザーク（1841～1904）もこれらにならい，自分たちのスラブの民謡に題材をとって連弾のための音楽を書こうと試みました。今日演奏するのはこうして作られた，全部で16曲のスラブ舞曲のうちの2つで，いずれも作曲者自身によってオーケストラのために編曲されたものです。

作品72の2はゆっくりした抒情的なホ短調8分の3拍子の曲で，バイオリンの独奏曲やムード音楽にも編曲され，広く親しまれています。

作品46の1はハ長調。フリアントと呼ばれる独特のリズムを持った，にぎやかで速い3拍子の曲です。

ボレロ……ラヴェル

ラジオの番組を見てもレコードの売れ行きを調べても近代，現代の音楽というのはベートーヴェンやモーツァルトに比べてどうしても人気が落ちるようです。その中にあって例外的に広く親しまれている近代の音楽の1つがモーリス・ラヴェル（1895～1937）の作ったこの「ボレロ」です。この曲はラベルが有名な舞踊家イダ・ルビンシュタインという人にたのまれて書いた舞踊音楽なのですが初演の時から成功をおさめたということです。

スペインのボレロのリズムをちょうど倍ゆっくりしたようなリズムが始めから終りまで繰り返される中をたった2つのふしが音色を様々に変えて出てくるのですが，クライマックスまでただ一本のクレッシェンドがあるだけで，その後に白熱的はコーダが来るという単純きわまる組み立てになっています。（仙名　保）

矛盾の両立

藤田由之

こと音楽には限らないでしょうが，世の中にはいろいろと，一見矛盾を思わせるものでありながら，それが両立せざるを得ない場合があるものです。

よく，音楽家仲間では＜音楽以前の問題＞という言葉が使われます。それは，音楽を演奏するに当って，それ以前に必要な最低限の知識や，広い意味での技能等を保持して演奏されるのでなければ，その演奏が音楽として評価される対象にならないといった場合によく使われます。例えばごく明瞭な楽譜の読み間違い，勿論音高，リズム，テンポ等もその代表的なものでしょう。一言にしていえば，最低限の読譜力です。また或る曲を演奏しようとする場合に必要な最低限のメカニズムをもつことも意味されるでしょう。

ところで，作曲家がある作品を書き，その意図を出来るだけ忠実に再現することは演奏家のつとめだといわれます。それには，先づ楽譜の力をかりることが第一となるでしょう。作曲家と演奏家とが時間的にも，距離的にも接点を持ち得ない場合には，それはもっと重要な意義をもちます。例えばバッハの頃というか，昔はその作曲家の作品が演奏される時には，その作曲家自身がその演奏に加わっている場合が非常に多かったのです。ヴァイオリンを奏いていたり，チェンバロを奏いていたり，今でいえば指揮者のような立場にあったとでもいえましょう。その作品の規模や機構が勿論近代のものと違うとしても，演奏上のこまかい注意などは，その仲間同志の間で容易に通じあうことが出来，作曲家の意図をその演奏の上に表現することは今から考えるとはるかにたやすかったといえます。それから時代を経て，すでに亡くなった作曲家の作品が演奏されたり，また楽譜だけが送られてきて，作曲家自身が直接それに携わることが出来ないという条件下（実際にはこれが殆んどの場合でしょう）で演奏が行われるようになると条件は変ってきます。

ところで，楽譜とは一体どれ程正確なものなのでしょうか。これはいろいろな面白い話題を提供してくれる問題で，ここではとても書ききれるようなことではありません。しかし，この事について少しふれてみましょう。例えばさっき述べたバッハの時代などでは，作曲者が演奏に直接たづさわっていて，他の演奏家達にその場でいろいろな指示が出来るためか，その楽譜には時としてテンポや強弱の指定のないものが相当認められます。ペテルス版と呼ばれる出版譜では，バッハの記さなかったダイナミック（強弱）などは一切記入されていません。ところで，今夜のプログラムに含まれているベートーヴェンの交響曲についてもふれてみましょう。今日，彼の交響曲の楽譜はいくつかの出版社から出されています。しかし前に述べたペテルス版のパート譜は大変興味あるものです。何故ならば，それはベートーヴェン自筆の原稿に忠実に従ったものであって，誰がみても誤りだと思われる部分も決して訂正されていないからです。若しこの楽譜をそのまま演奏したなら，これは或る意味では作曲者にまったく忠実だったといえるでしょう。しかし絶対に誤りだとわかっているのに原譜に忠実だという理由で，そのまま演奏するのは誰が考えてもおかしな話です。としてみると，ベートーヴェンの交響曲の場合には，原譜に忠実な演奏というものはあり得ないことになります。何故ならば，他の出版社で出されている楽譜では，その誤りが訂正されている場合がありますが，そのかわり彼が指定しなかったいろいろな書き込みが行われていたりするからです。

話は少しとびますが，ベートーヴェンはもっとも不幸な時代に活躍した作曲家だとよくいわれます。彼ほど進取の気性にとんだ作曲家も少いでしょう。例えば楽器の能力を最大限に生かすことについても彼は努力を惜しみませんでした。彼の時代に，若しサクソフォンがあったならば，彼は必ずその交響曲や他の作品にこの楽器をとり入れたに違いないということは，我々仲間では常に話題になる問題です。ところが，彼の時代には，管楽器，特に金管楽器に極めて大きな制約がありました。多少専門的なことになりますが，自然音といって倍音律に含まれない音を演奏することが出来なかったのです。そして中音部以上の音を，管の中に手を入れたりすることによって半音近くかえることが考えられましたが，これもその正確さにおいては問題にならなかったわけです。近代になって，ヴァーグナーなどが提唱して，若しベートーヴェンがもう少し遅れて生をうけ，既に改良された楽器を用いることが出来たならば，当然このようにしたかったに違いないというような推測，それも勿論立派な識見をもって楽譜の改訂が行われるということが起ってきました。ここでますます原譜による演奏ということばは蔭をひそめてゆきます。最近来日したあのストコフスキーにしても，ヴァインガルトナー，フルトヴェングラー，トスカニーニといった巨匠たちの何れもが自分自身の手になる改訂譜によって演奏しています。

或る時，私はある指揮者に対して質問しました。

「今度の演奏会では，ベートーヴェンの交響曲は，どういう版の楽譜をお使いになりますか」と。その指揮者は当然の様な顔をして，というよりもむしろ軽べつしたような顔でこう答えました。

「オリジナルだよ。僕はベートーヴェンの交響曲は原譜でやる主義なんだから」と。こういう時，ライブラリアン（楽譜係）は一体どんな楽譜を用意するのでしょうか。私には原譜といったら実際上には役に立たないペテルス版しか思いつかないのですが。

ところで一般のオーケストラや指揮者の間では，主にライプチッヒにあるブライトコップ＆ヘルテル社版の楽譜が最も多く使われています。前に述べた指揮者が云ったオリジナルとは，この版のことなのです。おそらく彼にはそれが原譜であるという確信さえあったのではないでしょうか。大変むづかしい問題になりましたが，こうしてみると，或る意味ではここでは音楽以前の問題というものが解決されてないように感じられます。しかし，このような経過をたどりながらもベートーヴェンの交響曲が演奏されます。そして聴衆にしても，演奏者にしても満足し，感激してその会を終ることがあるわけです。その時に＜音楽以前の問題＞はどう考えたらよいのでしょうか。それ程までに人々を驚喜させ，興奮させた演奏があったとしたら，それはやっぱり音楽とし評価さるべき対象になり得ているわけです。技術の問題にしてもそうでしょう。演奏するのは人間です。絶対にミスがないとは考えられないでしょう。しかしミスは明らかに＜音楽以前の問題＞です。それでも我々は多くの名演奏家のすばらしい音楽にうたれた経験をもっています。ミスがあったとしても，彼等の音楽には，聴く人の心を動かす何ものかがあります。ここに音楽上の問題があるのです。＜音楽以前の問題＞が解決されずに音楽が成立しないといいながら，何故＜音楽以前の問題＞を超越した感激が我々をおそってくるのでしょう。そこには人間の心があるからといえるでしょう。これは私自身がよく使う言葉ですが，上手だとか下手だとか，またその演奏に対する考え方が正しいとか，誤っているとか，そういうことを私は決して無視はしていません。しかし何よも重要なことは人の心を動かす音楽であるということです。ひらたくいえば，これもよく私の使う言葉ですが，＜面白い演奏＞（この言葉を誤解しないで下さい）こそ聴衆と演奏家とを結びつける最も大きなきづなといえるでしょう。

アマチュアのオーケストラの水準も最近きわめて向上して来ました。よい指導者もふえています。しかし，まだまだアマチュアがある曲目を演奏しようとする場合，根本的に無理のある場合が多々あります。個人個人自分のパートを音楽的なことを抜きにしても，技術的に演奏し得ない場合があるのは事実です。でもオーケストラというのは不思議なものでひとりひとりはそんな状態にあっても，一緒になると何となく奏けてしまうことがあります。（事実は奏けたような気がする場合が多いのですが），そして何となく曲の中に溶けこんでいってしまいます。この世界では酷ないい方ですが，実際には音楽以前の問題が解決されるのには，まだ相当の距離があるといえます。それでもその真摯な演奏は時としてプロフェッショナルなオーケストラの演奏より以上に人の心をうつことも出来るのです。それは何よりも演奏する人も聴く人も音楽を愛しているところからくるよい意味の錯覚といったらいけないでしょうか。

ところで私は再び自分の指揮者としての立場に帰ります。＜音楽以前の問題＞特に最低限の楽譜上のミスなどの問題は，やはり解決されなければならないはずなのです。事実これまでにどれ程たくさんのミスがそのままに演奏されてきたことでしょうか。しかしそれでも聴衆も演奏家もよろこびを得たのだから，それでよかったのだとは片付けられない問題です。＜目の前におかれた楽譜には必ずミスがある＞，これは私が十何年来持ちつづけて来た楽譜に対する考えなのです。

ここで三たび話をかえて，最後にひとつのエピソードを加えておきましょう。ヴィットリオ・サバタという有名な指揮者が，バイロイトで＜トリスタンとイゾルデ＞を指揮した時の話です。彼は練習の時すら暗譜でしたが，そのうちに既に何回も使われているパート譜，それもトランペットの２番に音の誤りがあることを発見しました。これ自体は彼の記憶力のすばらしさや，すぐれた耳に対する驚異を感ずる話題であり，私自身彼に対して勿論この上ない敬意をはらわずにはいられません。ただ，このトランペットの音が訂正されながった以前の＜トリスタン＞の上演もやはり聴衆に大きな感動を与えていたことを忘れてはならないのです。

いろいろと述べて来ましたが，私はここで矛盾の両立というものが，肯定（或る限定のうちで）されなければならないということを知って戴きたかったのです。この他にも作曲家が果して自作品を一番よく知っているであろうか，とか，音楽に於ける民族性と国際性などいろいろ話題はつきない筈ですが，いづれ機会をみて述べることに致しましょう。でも音楽を聴く時は，こんな理屈をぬきにして楽しむのも大切なことではないでしょうか。

（指揮者）

アマチュア・オーケストラの歴史 〔I〕

村 上 陽 一 郎

アマチュアということ

いわゆる泰西名画の中には，家庭での楽しげな合奏の有様を写したものが幾つかあります。究極的にはオーケストラに到るような合奏の歴史が，そのような団らんに始ったことは，容易に想像がつくでしょう。王様や貴族達が，それ専門の楽士を雇って，毎晩の団らんを，演奏する喜びから聴く喜びへと切換えてしまったとき，合奏にもプロが現われたわけです。言うまでもなく，プロには，生活の糧をそれに仰いでいるという絶対条件があるのです。

今日では，日本にも，プロのオーケストラが，東京だけで少くとも五つはあります。六つ目も，色々な曲折はありましたが，どうやらできかかっています。一方，アマチュアのオーケストラは，矢張り東京だけでも，この新響をはじめ，都民響，ＯＢ響，更には，目ぼしい大学には，必ずと言ってよい程，学生オーケストラがあります。やがて，このシリーズでも触れることになりますが，非常に歴史の古い慶大，東大，早大などに加えて，明大，立大，学習院大，青山大，一橋・東工大，中大など，多くの大学オケが活動を続けています。恐らく，この新響のメンバーにも，これら大学オケ出身の方々が多いことと思います。また，アマともプロとも言い難いのが，音楽大学の学生オケです。再び東京に話を限りますが，芸大，国立音大，武蔵野音大，上野学園，それに最近活躍の目覚しい桐朋音大などのオーケストラを忘れるわけにはいきません。

そこで，プロとアマの違いなのですが，勿論最初に述べたように，それで生活の資を得ているかいないかに依るのではありますが，オーケストラの場合には，更に一つの大事な条件がつけ加えられねばならないと私は考えています。それは，どんな指揮者が棒を振っても，そのオーケストラ自体の音の響きを失わない，つまり，最低限度，オーケストラ自体の音というものを持っているということが，プロであるための絶対的な要件と言えるのではないでしょうか。さもないと，指揮者は，先ずトレーナーとして，極く客観的な意味での“音造り”から始めなければならなくなるからです。この点を考えると日本の現在のプロ・オーケストラが，果して本当のプロの名に値するか，少し疑問かも知れません。

アマチュアのオーケストラの場合，そのオケ自体の音の持てない理由の一つは，練習時間が決定的に不足しているという点でしょう。大体一回三時間として，週二回の練習が，定期的に行える限度と言えます。絃のパート練習や，木管，金管だけのアンサンブルの練習なども，殆んど出来ないのが現状ではないでしょうか。もう一つの問題は，特に学生オーケストラの場合にそうなのですが，メンバーが固定しないという点です。現役の四年間というのは，たとえ或る程度以上のテクニックの持主ばかりであったとしても，オーケストラの音を纏め上げるには，短かすぎます。このような理由から，指揮者は，オーケストラを音楽的に響かせることよりも前に，徹底したトレーナーであって，短い練習時間の中で，如何に能率良く，各セクションの指遣い，音程，フレージングなどを叩込むかということに重点を置かなければならなくなります。従って，アマチュアのオーケストラでは，良いときには，可成り立派な演奏を聞かせて呉れる団体でも，悪いときにはどうにもならないという傾向が，強く現われることもまた，致し方ないのかも知れません。

アマチュアの意義

そこで，このようなアマチュアのオーケストラの存在意義ということが問題になってきます。これからのお話で，段々明らかにしていくつもりですが，我国の音楽界の創成期にアマチュア・オーケストラの果した役割は非常に大きなものがありました。今のように，Ｎ響が三晩，日フィルが二晩，東フィルと読響，それに立直った新東響も兎に角一晩と，各プロ・オーケストラの定期演奏会だけで，原則として月に八回も開かれるというようなことが，夢にも考えられなかった明治後期，オーケストラ運動の啓蒙的役割は，芸大や東大のオーケストラが担っていたと言っても間違いにはなりますまい。当時，漸く出現を見始めていた専門的音楽家達（例えば近衛秀麿氏等）も，そのようなアマチュアのオーケストラを足場としていたのです。

現在でも，オーケストラの生の演奏を聞いたことがなく，色々な楽器を直かに目で確めたこともない人々が沢山あります。アマチュアのオーケストラが，そういう意味で，一般の音楽水準を高めるという啓蒙運動を支える基礎の一翼を担っているということは，従って，今日でも真実です。プロのオーケストラの採算ベースにはのらないような地方にも，アマチュアならでかけて行くこと

もできますし，音楽教室を開いて，本物の楽器の音色に親んで貰うこともできます。私自身も，学生時代の演奏旅行でよく経験しましたが，そういう会場での熱心な聴衆の喰い入るような眼差しや態度は，今でも忘れることができない感激でもあります。また地方公演では，プロの団体が，演奏の質を堕すというのも，残念ながら時に見られる事実です。そのあとで，アマのオーケストラがでかけて行くと，"正直なところ大して期待していなかったが，この間のX響よりはるかに立派だった。"などという感想が聞かれるのも，必ずしも身贔屓だけではありますまい。或いは，大都会でさえも，音楽会人口は一般人口に比べて多いとは言えない現状にあるとき，営利を考えないで済むアマチュア・オーケストラの果すことのできる役割は，まだまだあるとも言えます。けれども，アマチュア・オーケストラの意義は，このような啓蒙的な場面にのみ存在するのでしょうか。もしそうだとしたらやがていつか啓蒙の必要がなくなる時がきたら，アマチュア・オーケストラの存在意義も消滅してしまうのでしょうか。

決してそうではありません。先ず"音楽を創る喜び"ということを考えてみて下さい。音楽に限らず，芸術が我々に与えて呉れる喜びは，創造の喜びです。演奏という行為も，創造活動の一つであることは言うまでもないでしょう。鑑賞することは，必しも創造活動でないとは言えませんが，併し，芸術に接する方法としては，創造の喜びからは一番遠いもののように思います。ですから私は，自分では何もやろうとせず，ただ他人の演奏やレコードを聴いて，ああだこうだと，いっぱしの理屈を並べて，批評するような態度が一番嫌いです。"音楽を創る"（さっきも言いましたようにこれは作曲することのみを意味しません。）ということの素晴しさは，やってみて判ることです。そこにはプロもアマチュアも区別はありません。一言けつ加えたいのですが，衣食の為に音楽するプロよりも，ただ趣味の為のアマチュアの方が，音楽する喜びは純粋だという議論がありますが，私には賛成しかねます。モーツアルトにしても，ベートーヴェンにしても，今日のパンの為に，どれほど多くの傑作を書いたでしょうか。名演奏家と呼ばれる人々の神技が，それで生活を支えるという理由で曇らされることがあるでしょうか。要は動機の如何ではなく，その人の心の問題であり，それだからこそ，その場面ではアマもプロもないのが本当なのです。

もう一つ考えられるのは，音楽を創ることの次の段階としての"合奏することの喜び"です。一般に，プロ，アマを含めて，演奏家には，合奏型とソリスト型とがあります。どんなに技術が勝れていても，音楽する心があっても，極端に自己主張をしたり，自己陶酔に陥ったりできない本性の人がいるものです。そうかと思うと，自分を他人に徹底的にぶつけなければ気の済まない人もいます。この前者の型の人にとって，合奏することほど大きな喜びはまたとありますまい。コントラバスィストは，自分の弾く低音（バス）が，流れる全音楽を下から支えているという感じをいつも楽しんでいますし，フルーティストは，オーボエとの火の出るような懸合いに限りない満足を覚えるでしょうし，打楽器奏者は，一つ一つの打込みに，一瞬の緊張した充実感を味わうに違いありません。このような，協力し合って音楽を創る喜びもまた，プロ，アマの差を問わないものです。特に，様々な程度のテクニックの人々が集るアマチュアのオーケストラでは，管楽器の場合は必ずしもそうではないにしても，初心者も初心者なりに，この喜びを持つことができるという利点があるのです。

元々，寄り集った人々が，弾ける楽器を合せて楽しむということに端を発した合奏，或いはオーケストラが，アマチュアの団体という形で，楽器を弾く総ての人々に対して開放されているということは，本当に素晴しいことなのです。アマチュアだから演奏が下手でもよいということには勿論なりませんが，アマチュアのオーケストラが，一人でも多くの人々に，音楽を創る喜び，音楽を共に創る喜びを頒つことができるのですから，それだけで，既に充分な存在意義があると言えますし，また，プラグマティックな観点に立っても，それを通じて，音楽人口の底辺を拡げ，堆積層をより厚くし，やがてはその風土の中から，単なる背伸びをした音楽的軽業師でない，本当の音楽家，演奏家が世界に育って行くことにもなりましょう。

我国のアマチュア・オーケストラは，初期のプロの代用品としての時代を経て，現在では，今まで述べてきたようなアマチュア本来の理念の下に，大きく発展しつつあります。次回から，そのたどってきたプロセスの後を顧み，また，今後待受けるであろう問題点などを，皆さんと一緒に考えて行きたいと思っています。（音楽評論家）

Cabrillo Music Festival

Artists, Audiences Enjoy Unusual Concerts by the Sea

§ §

キャブリロ音楽祭

家合幹夫

キャブリロ音楽祭といっても，その名を耳にした人はほとんどないに違いありません。

そうです，普通云われる音楽祭とは，ちょっと違っていて，アメリカのほんの片隅で行われる音楽祭にしかすぎないのですから。

しかし，そこにはローカル色豊かな，そして，そこにはとても近親感を感じさせるものがあって，皆様に御紹介したくなりました。

夏が来ると，一家そろって１週間から長い時は１ケ月位もの間，ヴァケーションをとるのは，こちらのごく一般的な習慣ですが，この音楽祭はそのヴァケーションを利用して行われます。

場所はサンフランシスコから70マイルほど（車で約１時間位）のところにあるサンタ・クルツという風光明媚な避暑地。

ここは海岸に面していますので，海水浴はもとより，サーフィン，ヨット，魚釣り，キャンプ，ハイキング等なんでも出来，子供達の為には遊園地まであって，夏休みになると避暑客で大いに賑わいます。

ここに各地の音楽家達がヴァケーションを兼ねて，家族連れで集まってくるわけです。日本でもよく知られた人はあまり来ないようですが，それでもそれぞれの地ではかなり知られた人達がサンフランシスコはもとより，ロスアンゼルス，シカゴ，ミネアポリス，ニューヨークあるいはカナダ等いろいろなところからやって来ます。

今年は８月20日から10日間行われますが，シンフォニーで幕が開き，オペラでその幕を閉じます。

ここの特色は何んと云っても，ただ演奏会が開かれるというだけではなく，音楽家達と個人的にも交流出来る点でしょう。

演奏会は別として，毎日行われるリハーサルは自由公開ですから，誰でも聞くことが出来ますし，学生は無料でレッスンを受けることが出来ます。又，腕に自信のある人は（いやない人でも）音楽家達とトリオとかクワルテットとかを組んで，いろいろなセッションを楽しむことも出来るのです。

一方，この音楽家一家とハイキングに出掛けたり，魚釣りをしたり，ゲームやカードを楽しんだり，又，夕食を共にして，それぞれの生活とか，趣味とか，音楽などについて語り合ったりして愉快な一夜を過すことも出来るのです。あるいは又音楽家を中心にグループになって音楽に関する，もっと突込んだ討論もやっています。

このように，そこには，もう音楽家だとか，サラリーマンだとか，学生だとか，職人だとかいうような垣根はとりはらわれて，ただ音楽を中心とした心と心のふれ合いがあるだけであり，親しさと楽しさにあふれた雰囲気があるだけなのです。

これはアメリカ人の開放的な性格が大いに作用しているようにも感じられますが，日本では一般的に音楽家と一般聴衆（あるいは音楽愛好家や普通一般の人達）との

間には何か目に見えない一線が引かれていて，何んとなく近より難さというものが感じられ又，実事そういう面が無きにしもあらずという感じがします。しかし日本にも一つ位，このような音楽祭があってもよいのではないかと思います。

このような音楽祭が各地で行われていると思われることも考え合わせると，この国の音楽性の豊かさや広さや深さというものを，更めて感じさせられるような気がします。(筆者はもと新響団員現在サンフランシスコ在住)

YOUTH concert is a festival highlight, and musically-gifted students have a chance to watch rehearsals and meet the artists. The festival awards several hundred invitations to area students to attend sessions.



皆　様　の　声

アマチュアのオーケストラ活動においても大切なもの，それはやはり私たちの演奏を聴きに来て下さる聴集の皆様方です。今回より聴集の皆様方の御意見を掲載することに致しました。御意見御批評等がありました是非お寄せ下さい。今後とも一層の御支援をお願い申しあげます。（送付先　東京都新宿区信濃町25　東京労音内新交響楽団）

小玉恵子（三井物産株式会社勤務）

そもそもアマチュア演奏家が公演を行う意義は何処にあるのでしょうか？

勿論金儲けでもなければ又世間一般の聴衆に自分達の実力を認めて貰う事でもないと思う。音楽に限らず公演と言う一つの行為は聴衆あるいは観衆を橋渡しとして，社会に働きかける大きな力を持っているのではないだろうか。従ってこの力が大きければ大きい程その意義もそれ丈深いものになる訳です。例え音楽がどんなに高度の芸術性をもって演奏されたとしても，それが演奏家自身の満足感のみに終ってしまったりあるいは限られた聴衆だけのものとして世間一般から隔絶されたものとなってしまっては誠にもったいない話である。新響の演奏会では演奏者が玄人ではなく，我々と同じ仲間であると言う意識が演奏者と聴衆とを強く結びつけ，良い雰囲気を作っている様に思う。アマチュアの特権として興行目的に関係なく，演奏者の望むままに純粋に音楽を探究する事も許される訳ですが前に述べた様に新響が生み出す音楽が聴衆の心を経て色々の形で社会に浸透する為に聴衆との連りをもっと考慮に入れて活動の計画を樹てて欲しいと思う。出来れば長期的な見地から系統的にプログラムを組み，活動方針を一般に公開して貰い度い。そうする事によってファンの新響に対する関心も一層深まるであろうし，又プログラムが系統的に組まれれば聴衆は毎回の演奏会によって唯，音楽を聞いて楽しむだけでなく一環した音楽の知識を身につける事も可能だと思う。この様な形の演奏会を重ねる中に聴衆もある程度固定し，新響なりの個性，あるいは特徴を生かして，近い将来会員制を実現させる事も比較的容易に考えられるのではないでしょうか。

以上，公演の意義について色々述べましたがファンは演奏技術の向上にも勿論大きな期待を寄せている事を忘れないで練習に励んでいただき度いと思います。

栗田　彰（東京都下水道局勤務）

友人がベートーヴェンの「第九」を聴いて「コイツを聴くと何かをしなくちゃなあと思わされるな」といったことがある。新響の英雄交響曲を聴いて，今度はぼくが同じようなことを感じた。これまでにも英雄交響曲を聴いたことはあるが，こんなことを感じたのははじめてである。「何かをしなくては」と感じさせるものが新響の中にあるのだろう。ぼくは新響の演奏を聴くたびに，その真剣さに心をうたれる。新響の持つ真剣さ，音楽に対する忠実さ，情熱，そういったものが英雄交響曲に結晶されていたのかも知れない。

新響に対してぼくは二つの要求を持っている。その一つは，ベートーヴェンの九つの交響曲を連続演奏で聴かせてもらいたいこと。その二つは，ベートーヴェンの九つの交響曲をレコードにしてもらいたいこと。

このどちらも，今の新響と労音の力で実現できることだと思っている。

半沢健市（東洋信託銀行株式会社勤務）

卒直なところ私は熱心な「労音」ファンとはいえない。その証拠に定期会員だったのは，ほぼ十年前の一時期でしかない。学校を出て会社へ勤めるようになってからは，仕事の忙しさを理由にレコードファンに転向した。
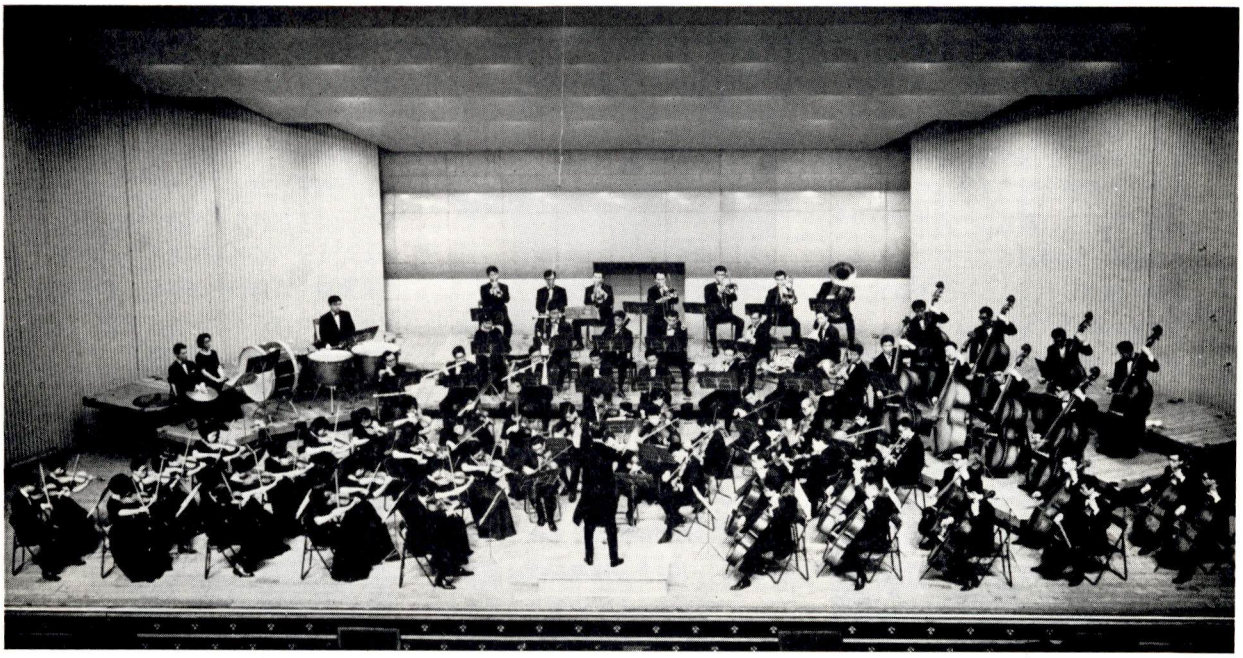
ところが最近，再び「労音」との結びつきができてきた。昨年の夏のある日，N君がひょっこり私のオフィスへ訪ねてきた。無沙汰に過ぎてから何年目かである。きけば，いま新響の管を吹いているという。彼が自ら演奏者であるのを知らなかったのはウカツの限りだった。それ以来私は新響のナマを時々聴くようになった。しかし回数はまだまだ少ない。それでもレコードは何回も聴いている。チャイコフスキーの「悲愴」交響曲をくり返し聴いている。このステレオレコードは新響の第一回吹き込み盤だが，実は私は盤面に針を下すまであまり期待していなかったことを告白する。それが何度か聴きながら，N君の話で知ったオケのメンバーが全員アマチュアであり勤め先をもった働らく人たちであるということを思い出してしまう。そうすると技量の巧拙を越えた純粋な情熱が感じられてくる。無論，カラヤン・ベルリンフイルやバーンステイン・NYフイルの響きには及ばないとしても演奏者諸兄姉が寸暇を惜しんで訓練した気迫が感じとれるのである。ナマの話にもどるが，おそらく「労音」の演奏会場の聴衆も職場の忙しさから必死に脱出してかけつけたのだと思う。音楽を演奏し，音楽を聴くという人間らしい行ないもいろいろな抵抗を排しながらやっているという現実。この苦しい条件があればこそ，私は新響の皆さんに強くお願いしたい。日本の働らく人たちが心から豊かな気持で音楽を聴ける日まで弦を鳴らし，太鼓をたたき，笛を吹き続けてもらいたいと。

新響第1オーケストラこの1年の歩み

年月日	会場	種目	作曲者名	曲名	指揮
1964年8月31日(月)	東京文化会館大ホール	新響サマーコンサート	J・シュトラウス J・シュトラウス チャイコフスキー フレデリック レーウェ リチャード ロジャース リチャード ロジャース	喜歌劇「こうもり」序曲 皇帝円舞曲 舞踊音楽「白鳥の湖」より 「マイフェアレディ」より 「回転木馬」より 「南太平洋」より	芥川也寸志
10月9日(金)	八王子市民会館	東京労音(八王子)10月例会	J・シュトラウス シューベルト チャイコフスキー	喜歌劇「こうもり」序曲 交響曲第8番ロ短調「未完成」 交響曲第6番ロ短調「悲愴」	芥川也寸志
1965年2月3日(水)	日比谷公会堂	第7回定期演奏会	スメタナ ハイドン チャイコフスキー	歌劇「売られた花嫁」序曲 交響曲第94番ト長調「驚愕」 交響曲第6番ロ短調「悲愴」	芥川也寸志
2月14日(日)	世田ヶ谷区民会館	レコード録音	チャイコフスキー	交響曲第6番ロ短調「悲愴」	芥川也寸志
3月28日(日)	千葉市新宿小学校構堂	東京労音(千葉)3月例会			
4月10日(土)	東京文化会館大ホール	東京労音4月例会			
4月14日(水)	共立講堂				
4月18日(日)	渋谷公会堂				
4月22日(木)	松山女子商業高校講堂	愛媛労音4月例会	スメタナ	歌劇「売られた花嫁」序曲	
4月23日(金)	宇和島市公会堂	宇和島労音4月例会	ハイドン	交響曲第94番ト長調「驚愕」	芥川也寸志
4月24日(土)	新居浜市民文化センター	新居浜労音4月例会	ベートーヴェン	交響曲第3番変ホ長調「英雄」	
4月25日(日)	高知中央公民館	高知労音4月例会			
4月26日(月)	中村高校講堂	中村労音4月例会			
4月27日(火)	徳島市民会館	徳島労音4月例会			
4月28日(水)	高松市民会館	高松労音4月例会			
7月24日(土)	浜松市民会館	浜松労音7月例会	ウェーバー	歌劇「魔弾の射手」序曲	芥川也寸志
7月25日(日)			シューベルト ベートーヴェン	交響曲第8番ロ短調「未完成」 交響曲第6番ヘ長調「田園」	



常任指揮者　　芥川也寸志



東京労音 新響4楽団 団員募集

東京労音・新交響楽団では、団員を常時募集しています。技術のうまい、まずいはいっさい問いません。オーケストラ楽器を演奏できる方は、いますぐ参加して下さい。

◇新交響楽団は東京労音の会員で組織され、昭和31年にスタートしました。

◇新交響楽団は現在、四つの団体（新交響楽団第1～第3オーケストラ、および新交響吹奏楽団）からなっています。わたくしたちはもっと団員を増やして団体の数を多くし、また優秀な奏者に入団していただいて演奏の質を上げたいと希望しています。

◇演奏なさる楽器、演奏の技術程度によって各団体のいずれでも自由に選ぶことができます。さあ今すぐ、ご希望の団体へ申しこんで下さい。電話で結構です。また見学も自由です。

□**新響第1オーケストラ**
常任指揮者：芥川也寸志、練習場：東京文化会館（原則として土曜6～9時）

□**新響第2オーケストラ**
常任指揮者：岡田和夫、練習場：東京文化会館（原則として日曜、6～9時）

□**新響第3オーケストラ**
常任指揮者：横山千秋、練習場：東京文化会館（原則として火曜、6～9時）

□**新交響吹奏楽団**（ブラスオーケストラ）
常任指揮者：斎藤好司、練習場：東京文化会館または東京交響楽団練習場（大久保矯風会館内）

問合せ先 **東京労音事務局** 東京都新宿区信濃町25
Tel.（351）5191（代）

東京労音 新響4楽団第2回合同演奏会

日　時　1965年10月11日（月）午後7:00開演

会　場　日比谷公会堂

曲　目

ベートーヴェン　レオノーレ序曲第3番 OP.72－b
指揮横山千秋　新交響楽団第3オーケストラ演奏

シューベルト　交響曲第8番ロ短調「未完成」
指揮岡田和夫　新交響楽団第2オーケストラ演奏

ホルスト　組曲第1番、組曲第2番
指揮斎藤好司　新交響吹奏楽団演奏

ベートーヴェン　交響曲第5番ハ短調「運命」OP.67
指揮芥川也寸志　新交響楽団第1オーケストラ演奏

会員券200円 本日会場受付及び東京労音事務局（信濃町・八重州）にて取扱中

東京プリンスホテル



シァターレストラン

マグノリア（2F）

世界の一流ミュージシャンが出演する豪華なショーをご覧になりながらマグノリア自慢の中華料理やステーキディナーをご賞味下さい。

中華バイキング　¥ 2,000
午後6時より12時まで

＊特別ショーのお知らせ
開館一周年記念 "トミー・ドーシー・ショー"
期　日　9月2日・3日
ショータイム　午後10時～11時30分
料　金　¥ 4,500（税・サービス料込）

東京都港区芝公園3　TEL434－4221
ご予約・お問い合せは(内)301～303

名古屋・覚王山信号北

名古屋においでの節は是非
お立寄り下さい。

ボナンザ レストラン

751－2280

AM11時－AM3時


YAMAHA
管楽器のコンサルタント
日·本楽器銀座店
東京都中央区銀座7—1 TEL 572—3111
毎週火曜日定休・営業時間 10.00AM～6.30PM（月曜日のみ 10.00AM～5.30PM）



日野 コンテッサ1300

5人乗り・55馬力・最高時速130キロ以上
前進3段(4段)・最小回転半径4.6メートル

コンテッサ1300は欧州調の乗用車――個性があります　合理性の追求から生まれた美しいスタイルと優れたメカニズム　それに軽快な運転感覚は　いま素晴しい人気です〈スタイル〉は　世界的カー・デザイナーG・ミケロッティの傑作　リヤ・エンジン車特有のプロポーションをもつトリネーゼスタイルは格調高く　海外でも〈東京の＊ヴィーナス〉と絶賛されています。

〈性能・運転感覚〉もスポーツ・カーなみリヤ・エンジン方式から生み出される独特の強い牽引力で加速性能は抜群　軽いアクセル操作で急加速も思いのままにできますラック・ピニオン式ステアリング機構によりハンドル操作も軽快そのもの　このスポーティな運転感覚を試乗してお確め下さい

Hino

日野自動車工業株式会社
日野自動車販売株式会社